

市民活躍・地域コミュニティ活性化特別委員会記録
【 速報版 】

令和7年12月3日開会

速報版

- この会議録は録音を文字起こした初稿のため、誤字脱字がある場合があります。
- 正式な会議録が作成されるまでの暫定的なものため、今後修正されることがあります。
- 正式な会議録が掲載された時点で速報版は削除されます。

横浜市会

開会時刻 午前10時00分

◎ 開会宣言

○ 麓理恵委員長 おはようございます。これより委員会を開会いたします。

上着の着用は御自由に願います。



◎ つながり再構築に向けた地域支援の取組について

○ 麓理恵委員長 それでは、議題に入ります。

つながり再構築に向けた地域支援の取組についてを議題に供します。

本日は、参考人として、一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわ代表理事手塚明美氏。NPO法人街カフェ大倉山ミエル理事長鈴木智香子氏に御出席いただいております。

なお、本日はオブザーバーとして、市民局の関係職員にも出席いただいておりますので、御了承願います。私のほうから一言、御挨拶を申し上げます。

本日は大変お忙しい中、本委員会に御出席いただきまして、ありがとうございます。委員会を代表して、御礼を申し上げます。座らせていただきます。

手塚様におかれましては、20年余りの地域活動と社会教育活動の経験を生かし、現在のNPO法人藤沢市民活動推進機構の創設に参画され、その後、2001年から2013年まで藤沢市NPO支援施設のセンター長を務められました。

2012年には、県内各地のNPO支援者とともに一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわを設立され、NPO支援の在り方を柱に、情報収集・発信を進め、非営利組織のマネジメント支援を中心に、組織の自己診断を通じた伴走支援に取り組んでおられます。

鈴木様におかれましては、北海道札幌市で公園遊びの会旭山公園キッズを立ち上げられた後、2006年に、新横浜でボランティア団体公園遊びの会おるたんを設立されました。

2010年には大倉山商店街内に、街カフェ大倉山ミエルを開設され、2011年にはNPO法人化し、理事長に就任されました。

現在も街カフェの運営を続けながら、横浜市内各所で地域まちづくり支援活動を展開され、また、まちづくり専門家によるNPO法人横浜プランナーズネットワークの会員としても御活躍をされております。

本日はお2人から、つながり再構築に向けた地域支援の取組についてというテーマでお話を伺えるとのことで、御講演を拝聴し、勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

それでは初めに手塚様、どうぞお願ひをいたします。

◎ 手塚参考人 皆様、おはようございます。本日はお話を聞いてくださるということで、資料をたくさん作ってきましたが、時間でお話を終わればと思いますので、どうぞよろしくお願ひをいたします。マイクを使わなきゃいけなかつたのですね。

○ 麓理恵委員長 どうぞ御着席でお願いします。

◎ 手塚参考人 大変失礼しました。では、着座にて失礼いたします。

それではスライドが映っておりますので、このスライドの順番で、最初はタイトルですが、地域活動を市民活動への、国民というか市民というか、意識を少し皆さんにお伝えしたいと思っています。

それから、私が取り組んできた活動について少し御紹介をして、最後に何かアイデアがないかなということで作ったものを、皆さんに御説明したいと思っています。

では、1枚目から行きます。地域活動とか市民活動への意識というのを、内閣府が毎年調べていたり、横浜市さんでも調査をする。それから全国的にも、違う省庁でも、ボランティアのお話とかは随分あります。そういうものをちょっとだけデータを見ながらお話をすることが多いので、このたびも皆さん御存じだと思いますが、一応こんな意識で私の資料が作られているという前提を皆さんにお知らせしたいと思いました。

まず内閣府が本当に、1974年ということは相当、バブルの前、本当に経済的な価値を高めようとしていた頃に、社会への貢献意識というアンケートを始めました。

社会意識に関する世論調査というのがありますと、日頃社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますかという設問に対し、このようにブルーのところが、思っている。オレンジがあまり考えていないということで、これはコロナの前までなのですけれども、近年はこういう状況の中で割と6割以上の方が社会貢献意識を持っているというのが、現状ではないかと思っています。

縦に赤い点々のラインを入れたのですが、これは最初、私は入れていないで、これをいつも御紹介していましたが、そもそも何が起こったときにドラスティックに数字が変わるかということがちょっと気になりましたので、少し日本で起こった、ちょっとしたアクシデントを、インシデントかもしれませんけれども、入れてみました。

そうしますと、このきっかけになったかどうか分かりませんが、日本列島改造論が出た頃の直後にこれが始まっているということや、あとは日経株価の平均、今はもう4万、5万の時代ですけれども、当時1万円を超えたのは非常にセンセーショナルだったとき。その次に、民間活力の導入法というのが中曾根総理大臣の時代にできているのですが、その頃ぐらいまでは、このように上下それほど数字が変わりません。ノイズもあるので何とも言えないのですが、そこから、一気にバブルの崩壊に向けて、思っている人が増えてくる。これを私は、最初はこうやってドラスティックに数字が上がるのではなくかと思ったときかなと思っていたのです。確かに、ある意味困ったときなのですけれども、でもそこから、意識が下がることなく、今に至っていると。やっぱり経済的なショックについては、例えば2008年のリーマン・ショックのときもぐっと上がっていたりするのです。こういう状況がやっぱり日本人の気質にあるのかなというのを思いながら、資料を作させていただいている。

2020年の後、これは対面でのアンケートだったので、コロナの関係でできなくなりました。ですので、その後は今、皆さんのが御存じのアンケート形式ということで、郵送法を使ってアンケートを取っているのですが、やはり、こうやって令和の年号になっていますけれども、6割は超えるということで、コロナの直後はかなり、65%ぐらいまで上がり、なおかつ男性の割合が増えたというのが特徴でした。今は63、それから34というふうに落ち着いたということです。

この人たちが社会の一員としてということで、何をしているかというと、現状、自分の職業を通してという方がとても多いです。今の時代、お仕事をしていても、お仕事の中にCSRとかSDGsとか、そういう文言が入ってきて、社会に何か役に立つようなお仕事をしたいと思う若者がすごく増えていることは事実です。私も大学の授業を持っていた時期もあるのですが、その当時、2年ぐらい前までやっていたのですけれども、学生たちが就職のときに、やっぱり給料がよければいいとか、生活が安定するからいいとかという話ではなく、社会に何か役立つような仕事をしたいみたいな理想、私たちからしてみると、私が就職した頃は

そんなことを考える人はいなかつたので、多分ここにいらっしゃる皆さんは、きっと、そういう思いは御理解いただけると思うのですが、本当に増えたことを実感しました。

そんなことをしている中で、でも環境美化とか、高齢者・子供というようなところにも、きちんと参加をしている人が多いということがここで分かります。

つまり、自分のための何かも、もちろんするのですが、誰かのための何かも意識の中にはあるということが、こういうデータを見ると顕著に表れます。横浜のデータ、神奈川県のデータも全部見ているのですが、こうやって自治会町内会とか、それからもうちょっと遠いNGOとか、そういうところに参加してもいいなと思っている人は、実はやっぱり6割ぐらいいるのです。

ただ、実際、じゃあ行動している人がどれくらいいるかというと、ボランティアというくくりの中でデータを見ると、2割を行ったり来たりです。だから、その辺りの意識をどう政策として変えていくかということになると思いますので、ぜひそういう意識で市民の方とのコミュニケーションを取っていただけるといいなと思いました。

それともう一つ、最近、NPOとか市民活動とかを第三セクターと呼ぶことが多いです。第三セクターだから1があつて、2があつて、3があるという話になるので、そうなるとどうしても三角形を書きたくなる。これは人の常だと思います。通常ですと、トップにSTATE、行政とか政府のセクターを置いて、右側にMarket、ここが企業とか営利事業体のところ。左側が実はこの図の肝なのですけれども、ここにはCommunityとは書いてありますが、なんと世帯とか家族という訳です。私は英語が全然できないので、本当に直訳かもしれません。真ん中にAssociationsと書いてあって、ここにThird sectorと書いてある。

出典も書いてあるので、後ほど、このビクトル・ペストフという先生の講演録とかも、それほど古い方ではないので、つい最近まで御存命だったと思いますので、お調べいただけるといいかなと思いますけれども、ここにVoluntary/Nonprofit Organizationsって書いてある。私もこれだとすごく落ち着くのです。自分自身がNPOとか、ボランティア団体とか、もちろん地縁も自治会町内会長もやっておりますので、地縁の組織もやっていますが、地縁はどちらかというと左角に近いような活動かなと思いつつ、真ん中のAssociationsの中にいると、実は丸いので、これがAssociationという言葉は天文学にあるのですけれども、自分で発光する星、なおかつ、重力にあまり左右されないという特徴があるようです。恒星というんだそうです。

同じように、私たちは自由に団体をつくり、何か課題を見つけて解決しようと、自分の発想で物事を進めるって、自分で光るというようなイメージでお話をすると、この立ち位置がとてもしっくりくるので、例えばNPO支援とかボランティア活動の初めの一歩とか、そういうお話をするとときは、この立ち位置でお話ができるといいなというふうに考えてこの図を皆さんにお伝えさせていただいている。

つまり丸いですから、大きくなるとStateやMarketに近づく、逆に言つたらぎゅっと上に寄れば行政や政府との協働事業もできるし、右側に寄ればNPOが企業との協働もできないことはない。なおかつ三角の角までに入ることは難しいので、やっぱり文化が違うということを認識しながら、一緒のことをできる。私は絵から入る人なので、そういうふうに考えると、とてもうれしい。やっぱり地縁の団体は限りなく左隅にどんどん寄つていって、世帯や家族と、やっぱりしっかりとコミットしていかなきやいけないと言いつつも寄つていく団体さんが、私はそういう意味では自治会町内会はぐつと左の下の隅のほうへ寄るよう

なAssociationが、今の自治会町内会ではないかというふうに考えております。

これは一応直訳をしたので、参考にさせていただけたらいいなと思っています。

先ほどの私の紹介のときに、二十数年の地域活動と社会教育活動という前段があったと思うのですが、実はNPOをつくる前に、20年くらいそんなことをやっていました。

私自身はある住宅メーカーに勤める職員で、学校も工学部建築学科というところを卒業しているものですから、鈴木さんも同じようにおっしゃっていましたが、何か町をつくるときの基礎みたいなものをとても大切にしたいと思っている人間です。建物も、もちろんそうですけれども、阪神淡路の震災のときは現業で少し手伝いをしたのですが、やはり建物は幾らでも材料があれば建ちます。ですけれども、町の崩壊をしたものをまた寄せるのは、人の気持ちがそこに寄らないと、町はにぎやかにもならないし、温かくもならないということを現実的に私は感じてきました。

ですので、そういう形の取組をしてきたつもりなので、それをちょっとだけ御紹介したいと思っています。

今回お呼びいただいた、一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわというのがあります。紙の資料を1枚も持ってきてなくて、この資料で皆さんに御紹介するのですが、右隅に三つ折りのリーフレットを作っていた、その表紙なのですが、ちょっと字が小さくて読みにくいと思いますが、ここは2008年につくっています。2006年に企業とNPOをつなげたいと思ったのです。それで、企業とNPOをつなぐと、神奈川はもっとすてきになるというキャッチコピーで団体をつくりました。

それは、神奈川県はあまり、企業との連携事例というのが少なくて、私たちがその県域にある中間支援組織、つまりサポートセンターとか支援センターとか、そういうふうに呼ばれているところが神奈川県は全国一多いのです。特に横浜は、区活も入れるとなんと48もあるのです。全体の中間支援施設は日本中で300ぐらいしかないので、その中の50近くが神奈川県にあるって、物すごい支援力だと私は思っています。その人たちと一緒にこの組織をつくりました。

こんなときに御相談くださいということで、分からぬこと、だから、企業・学校関係者様向けとか、市民団体・個人様向けということで、通常のNPO支援者というくくりではなく始めさせていただきました。講座もやりますよ、それから御相談もお受けしますということでつくり始めました。

それともう一つ、かながわコミュニティカレッジ、皆さん御存じだと思いますけれども、人材育成、これはかなりの講座数をやっているのですが、特別講座を含めて35講座を1年中やっています。その中でいろいろ分野も別れているのですが、特徴は、動く人材をつくる、つまり出口をつくる。いろんな団体さんに、実はセミナーをやっていただいているのです。1コマのは特別講座のみで、あとは連続講座になっています。

今年は珍しくアウトリーチと言って、外に出た講座も、横須賀市させていただいたのですが、それすらも2回、3回連続講座にさせていただいていて、皆さんのが肌で感じたこと、それから学んだことをしっかりと地域で生かしてくださいということで、出口を必ずつけて皆さんを送り出すようにしています。

もちろんそれをやったからといって100人が100人、皆さんのが動けるかといういろんな事情があります。やっぱり2割か3割なのです、気持ちがある人を集めて。でも、それがもしかしたらまちづくりの一つになるのではないかということで、おかげさまで県の委託事業ですが、5年ほど取り組ませていただいています。

それと同じように御相談業務、これはソーシャルコーディネート神奈川の専売特許ですので、県民活動サポートセンターの9階で窓口の相談を受けています。これについては、オールマイティーの職員が世の中に

はいるわけではないです。でも、人の話を聞くことは誰にでもできるというスタンスの中で、まず聞く。聞いて、分かることはお答えする。分からることはちゃんと調べて、またきちんと連絡をするというスタンスでやらせていただいている。

それぞれの各地で、今、小田原、それから秦野、平塚、あと横須賀のほうとか、横浜の中の方、それから川崎の方、皆さんが相談員として、20名以上の方が私どもの相談を受ける人ということで、しっかり登録をして、1日2人体制で今受けています。

耳は4つあったほうがいいというのが、私の持論です。1人で聞くと、どうしても頭の中でいろいろ情報の傾斜配点をしてしまうので、そこを2人で聞くことで、きちんとした、まっすぐな質問なり、お悩みなりが聞けるんじゃないかなということで、今ずっと、こちらも毎年のプレゼンをしなきやいけなくて大変なわけですけれども、手放すことなく続けさせていただいている状況です。

2025年の強化案件として伴走支援と、これは相談のほうです。他組織との連携とか、解散が最近相談が多くなったので、ここも強化案件として取り上げています。

最近始めたのが、伴走支援ということで、横浜でいうと、よこはま夢ファンドの取組にちょっと似ているのですけれども、中間支援のネットワークを使ってサポートーさんを各団体さんに入れて、今20団体に伴走させていただいている。

横浜市内の協力中間支援組織としては、戸塚のくみんネットワークとつかさん、それからまちラボさん、アクションポート横浜さん、森ノオトさん、セクターよこはまさんという皆さんに御協力をさせていただいて、その他の県域の組織としては、ここに並んでいる市のサポートセンターの皆さんに御協力をさせていただいてやっています。

どんなことをやっているかというと、ぐるっと悩みを聞いて、お悩みを解決するためのサポートをする。私たちが解決を全部できるわけじゃないので、お手伝いをすることになっています。

こんなシートを使いました。これは組織を支える17の視点という自己診断シートというのを、私が今もおりますが、もともといた藤沢のNPO法人で開発しまして、それを使っていただいて課題を可視化できるようなツールを使って、今それを進めております。

こんな感じで、どこが出っ張っているのとか、V字かな、ダブルかなとかというのを言いながら、こんなふうな折れ線グラフやチャートを使って診断をしてやっています。これが内部のコミュニケーションツールとして皆さんに配付しているということがここに書いてあります。

じゃあ、それを踏まえて、あと10分ほどですので、地域支援の取組をどう私が考えたかということです。まず、横浜と言って私たちがまず思い出すのは横浜コードです。まだ、NPO法ができて直後ぐらいです。横浜コードというのがセンセーショナルに私の耳に入ってきました。それを見ながら、やっぱりつながるってすごく重要なんだなということを感じ、横浜の取組にずっと着目していました。

それから十数年たって、横浜市市民協働条例というのに変わりました。そのときも協働の方法は、今のホームページを見ても横浜コードは載っていますし、これはもう日本中の中間支援の人が着目した事例だったので、私も近いしょと、いえ、私は横浜市民じゃないのですって言いながら、何となくお話をしたのをよく覚えています。

ここに書いてあるように、協働の方法というのは本当に多種多様で、そういうところを着目しましょうということもありましたし、対等の原則とか、いろいろそういうメッセージも私は受け取りました。

横浜市市民協働条例をちょっと見たところ、ハイライトを赤くしているところが幾つか、私としては少し、こういうのをつくるんだというのが気になつたので、ハイライトをしました。

まず、協働事業をした場合は公開するというふうに入っています。それは市も市民も両方ともやってくださいと書いてあるのですが、あまり公開がされていないように思いましたので、ここはもう少し外に向けて、手前のところを見ると、例えば後援だったり、共催だったり委託も協働だというふうに書いてあったような気がするので、もしできたら、そういうのも、実は公開している市町も幾つかありますと、神奈川県内だと茅ヶ崎が意外と有名です。

それから、その次のページに書いてありますけれども、調布市は協働の報告書と言って、一つ一つの、ぜひ、よく役所で出す報告書みたいな冊子みたいなものまで出ているので、もし御興味があつたら御覧いただくといいのかなと思いました。

もう一つ気になったのが、この自主事業の欄で、協働事業を行うと、あらかじめ市に届け出るという項目が1行ありました。この法律ができたときに、ちょっと気になつてたのですが、私は横浜のお仕事はあまり丁寧にしていなかつたものですから、そのところがよく分からなくて気になつたまま、なんと十数年過ぎてしまいました。昨日たまたま区民活動サポートセンターの研修があったときに、そのお話をさせていただきましたら、一応運用規則というので、そこまで縛りをつけてはいるわけではないですよというふうにおっしゃつていただいたので、現実にお困りになることはないのかもしれませんけれども、あらかじめ市に届けると書かれちゃうと、ちょっと私はどきっとするなということで、一応ハイライトしておきました。

横浜市市民協働条例の中間支援組織のところも様々ハイライトを入れさせていただいたのは、そもそも中間支援組織とはというのが実は書いてあるのですが、実際にこれを全部どなたがやるかということは、とても難しいお話になるので、そこもちょっと皆さんで御検討いただいて、しっかりと仕組みにされるのがよろしいかなと思いました。

中間支援組織の育成という文言で書いてあるのですが、組織が育成されるのは、中に人材がいないと実は育成されないです。ですから、コーディネーターに近い役割の人たちを率先して育成することで、この中間支援組織の育成にはなると。逆に言つたら、どういう育成の仕方をするかということもあると思うのですが、その辺りもちょっとお考えいただけだと、非常に前に進むんじゃないかなと思いました。

それと一番最後、横浜市における中間支援の数というのを入れまして、NPOは定款が全部内閣府のホームページに載っておりますので、そこで、20番目、特定非営利活動の種類という、どの定款も第4条というところに書いてあるのですが、そこに20番目の支援・援助をチェックした団体さんをカウントすると、440団体、1464団体が横浜市にはNPO法人があるのですが、その中の440団体がそこにチェックをしています。

ですので、そこにいらっしゃる人材をしっかりとサポートすることで、中間支援組織の育成というのはできるのかなとちょっと思いました。神奈川県の約半分ぐらいの団体がこちらにいらっしゃるということですので、ぜひそういうところも着目していただいたらいいと思います。協働契約も進んでいますので、とても羨ましいと市外の人間は思っています。

自治会町内会に向けた取組も、横浜市のホームページにはいろいろと書いてあります。これができるか、できないかという問題もあって、なかなか難しいことだというのは十分に分かります。ただ、一つ一つ丁寧にアプローチをすることで、もしかしたらできるものはどれかというのを、自治会町内会さんに提供することで、もしかしたら運営がスムーズにいくかもしれません。

実はドラッカーのマネジメント論でも、非営利組織のほうが営利組織よりもマネジメントは難しいのです。やっぱりお金で解決できないし、気持ちが乗っていなきやできないので、そういう意味では、実行している皆さんのお気持ちに十分に耳を傾けるということが重要なのかなというふうに私は考えます。

よくあるパターンということで4つ出しましたが、私としては、この1番目と2番目のデジタルも含めて、やっぱりあまり得意分野ではないので、ここはミエルの鈴木さんにお任せするということで、一応それでも今、神奈川県で取り組んでいるのが団地の空き室、空き店舗活用による多世代交流スペースの確保というところを、ちょっとだけ御相談されていて、私も少し興味があるので、古くなった団地、それから空き店舗みたいなところを再生する方と少しコミュニケーションを取っています。

二宮町とか、それからあと横須賀方面とか、そういうところで積極的にやっている方、それから水産業と福祉の連携もやっていますので、福祉の方たちとのやり取りも最近増えてきたので、そういうところで福祉の事業所みたいなものが少しでも広がると、もしかしたら学生さんとのコミュニケーション、それから外国籍住民とのコミュニケーションみたいなものも取れるんじゃないかなということで、自分の取組の中から雑駁ですが、ここに資料として載せさせていただきました。

やっぱり、私としては地域資源の再発見、有事の際に起こり得ることを想定して平時をつくり出す。多分これから先は、そういうやり方をしないとなかなか難しいということがありますので、私自身は、民間のホールとか大学というのは、地域の住民インフラじゃないかと思っています。

例えば、横須賀にある県立の福祉大学は3.11のときに、あそこ一帯が全部停電になったのです。寒いときでしたから、3月でしたから、真っ暗になって、物すごく皆さん怖かったと言っています。でも、その大学は非常電源があるので、こうこうと明かりがついていたから、あそこは避難所じゃないのにたくさんの住民が来て、そこで一夜を過ごしたということを聞きました。

やっぱり、住民にとって大きな建物というのはインフラです。ですので、そういう考え方もなしではないという、要するに、絶対じゃないですよ、なじじゃないという緩やかな考え方をお持ちいただけるといいなと思っています。

それから活動人材ですが、かながわコミュニティカレッジの場合は、先ほどしつこく言いましたけれども、テーマ別にセミナーを行っています。やっぱりテーマが分かったほうが人は来るので。全体に地域活動しませんかでは来ないです。ですので、テーマ別のセミナーをし、なおかつ活躍の場をたくさん提供し、そして相談を受けられますという窓口も紹介しています。ですので、比較的スムーズに、皆さんに活躍をしていただけているんじゃないかなと思っています。

一番下に書いてあるコーディネーション支援ですが、中間支援の業務です。昨日たまたま区活の皆さんのお勉強会を開いたのですが、皆さん本当にお勉強家なので、お伝えしたことは全部多分持って帰っています。でも、それを生かそうとしたときは、自分で経験をしないといけなかったりします。それと経験値と学習値というのは反比例しますので、経験値が上がれば学習値は少なくとも人と会話ができます。ですが、やはり行政の方も順番で2年、3年で変わったりすると、やっぱり学習値がなかなか生かせる経験を積めないこともあります。

なので、全部が全部、例えば戸塚のセンターというのは委託になっていまして、そこはやっぱりもう少し長いスパンで職員形成をしています。そうすると、やっぱり力がつくというのはよく見えます。ただ全部が全部はとても無理なのは分かりますので、少しそういうコーディネーター職の方を民間から登用すると

か、昔は公民館でもそういう事例がありましたよね。そういうような、少し緩やかな運用をされるとよろしいんじゃないかなということが、私の提案になります。

それから、行政・企業・NPO等の協働の体制づくりということでシーズの発見率とか、どこに何があるかが分からないとつながれないので。ですので、先ほどつながりに関する情報の公開で、調布市の事例を御覧くださいと、意地悪ですよね、メールを持ってきていないのです。でも、行くと分かります。明らかに報告書も書いてあるし、こういうものが世の中にあるんだというのを、私は本当に最近気づいたのですが、調布は確か24、25万の都市なので、できるのではないかと思います。

でも、全部は無理でも分野別にすることはできると思いますので、教育委員会のこともやっていましたので、何となくイメージとしては、ああいうのがあるといいなと個人的に思ったので一応書きました。

それから、同じように先ほど中間支援の人材を育成することで、中間支援組織の醸成はできるんじゃないかなと思っていますので、ぜひそういう意味ではその辺りも着目をしていただいたらいいなと思っています。

私自身の、藤沢で市役所からもらっている名刺に書いてある役職は、協働コーディネーターと書かせていただいて、そのほかは法人の理事長というふうに書いてあるのですが、やっぱりそれを出すことで、皆さんにお話をしっかりと伝えてくださいますので、ぜひそういう形がよろしいのかなと思っています。

それから最後、GREEN×EXPO 2027が今回2年後ぐらいにありますよね、1年半ぐらい後ですか。ああいうところに市民ができるだけ参加できるような場所をつくっていただけるといいなと思いました。

ただ、連続して会期中全てというのはやっぱり難しいので、マルシェ型とか役割分担とか、週替わりとか、日替わりとか、何か工夫をして市民が参加できるしっかりとしたイベントにしていただけるといいなと思いました。

私は万博が大好きで、大阪も行きましたし前のときも行きましたし、それからつくばにも行って一番面白かったのはつくばだったかなと思うのは、とても手作り感あふれる万博で、ああいうのいいなってちょっとと思っていたので、そんなことを想像してここに書きました。学校も企業も多分出るんでしょうけれども、NPOもちょっと参加できるといいなど、でも、もしかしたら公募しているのかな、それも見ていないわけじゃないです。ただ公募の仕方もちょっと工夫していただけるといいなと思いました。

これは調布の報告書の1例、140ありますよと、これは数字だけ拾って、一番これが影響力ないかなと思って持ってきました。

一応、私の持論は、課題解決をするときに、いろんなところが組むといいよねと言って、融合したり、それぞれのアプローチをしたり、輪っかをつくったり、こういう私たちがやっているのが、私は藤沢ではこんなことをやっていて、相談事例がすごくいっぱいあります。地域活動の相談も実は受けているので、町内会の解散の相談も受けますし、保育園の評議員を探しているなんていう相談も受けます。減少してきたのでどうしようとか、企業からも住民にどうやって宣伝したらいいかなっていう相談も受けています。

ですので、そういう意味では、いろいろと手当てをしたつもりです。融合して一緒に取り組むということで近くの居酒屋さんに委託して地引き網をやってもらったらどうだとか、おみこしを担ぐチームは何とか睦とか言うのですけれども、そういうところと一緒にやつたら、おみこしも棚に飾っておくだけじゃなくて、表に出せるんじゃないとか。清掃チームも、愛護会というのは横浜もあると思うのですけれども、そこと違う町内会がつながってもいいんじゃないとか、近隣の商店街に自治会のブースを出してもらうみたいなこともお願いをしたり、そうすると寄附をもらったりとかしています。

最近あったのは、これは葬儀場なのですが、葬儀場と協定書を結んだ町内会が今あります。どういう協定書かというと、いつとき避難所として葬儀場のロビーを使わせてほしいという申入れをしたら、その葬儀場のオーナーさんがいいよと言ってくれたので、今、覚書を交わして、協定書自体も交わしているのですが、防犯のほうの協定は入っていなかったので、別途覚書を交わして何かあったときには避難する。つまり、この建物は葬儀場だから非常電源があるのです。なので、暗いところにいなくても済むので、そこに近くだったら行けるけれども、遠い避難所までは行かれないという、要避難者という方もいっぱいおりますので、そういう契約をしました。

昔から、これは私が小学校のPTAをやっているときに、こんな図がありました。でも1990年代の動きと書かせていただきましたけれども、本当に、こうやってみんなと力を合わせろよという図を見せられて、私はいろんなところとつながって、地域活動をしていました。

これが2025年、厚労省にある図です。やっぱり、つながるってすごく大切で、真ん中に住民がいるということを意識しなければいけませんよねということを、手を替え品を替え言っていても、なかなかつながらない。やっぱり政策はすごく大事だなと思いますので、政策提言も、私たちもしなければいけないのですが、なかなか力及ばずでできません。私がこうやってお話をさせていただく機会を頂いたので、これからもいろんな偶然を引き起こしながら、必然に私の頭の中に入れて、皆さんにお伝えできるタイミングを見計らっていきたいなと思っています。いろんなことが起こります。でもそれがとても楽しいです。やめられないです。活動はつくりたいと思っています。I can make a differenceは、今日と違うあしたをつくるという言葉です。きっと今日よりもよいあしたが迎えられるということを信じて資料を作りました。

すみません、おしゃべりでちょっとだけ時間をオーバーしましたが、私の説明は以上となります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

- **麓理恵委員長** 手塚様、ありがとうございました。

それでは引き続き、鈴木様にもお願いをいたしたいと思います。どうぞ、着座のままで結構です。

- **鈴木参考人** 大倉山ミエルの鈴木と申します。よろしくお願いします。じゃあ、進めさせていただきます。

今、手塚さんのはうから、本当に県域のデータを示していただいて大きなお話をさせていただいて、それをもう横で首がもげそうになるぐらい、うんうんしていたのですけれども、逆に私のほうからは本当に地元の小さい、今やっているのは小さなNPOで、そのカフェで起きていることを実際に聞いていただいて、それが今度は、多分最後は、また今の手塚さんのお話につながるなというふうなことを思いながら聞いていました。

こちらです。2枚目です。こちらが私たちが、コミュニティカフェをやっている小さな場所です。ここはオーナーさんが昔ギャラリーをされていたのですけれども、住宅街の中です。もうオーナーさんが高齢になられて、京都のはうに移住されたので、空き家になっていました。それを私たちが借り受け、今やっています。

でも、この場所も2018年からで、実際に私たちが大倉山商店街でコミュニティカフェを始めたのは2010年です。2010年からこの2018年までの間に、なんと3回も場所が変わりました。その辺が、やっぱり私たちのような小さい居場所が継続していくのがなかなか大変というところの理由かなとは思うのですけれども、それを今この場所では継続しています。

今回は活動事例と、そこで私たちが気がついたことを、最後に少しお話させていただけたらと思います。

大倉山ミエルはマイナス1歳から101歳の徒歩圏の緩い小さな居場所というところと、あと大倉山地域の活動をつなぐ活動、3番目にコミュニティーの活性化支援と、まさにこちらの委員会のお名前があるみたいな。でも、コミュニティーの活性化支援の中では、先ほどあったような伴走支援であったり、またコミュニティカフェをカフェ型中間支援というふうに言うこともあります。いろいろなコーディネーターもやっておりますし、あとは市域でのネットワークをつくっています。

お手元にたくさん、思いあまつていろんな資料をお届けしたのですけれども、緑色のパンフレットが私たちの活動のパンフレットです。その中にこのミエルの木という絵が書いてあって、マイナス1歳から101歳の徒歩圏の緩い居場所、このやっぱり緩いということと、小さいということが特徴なのです。

真ん中の辺りに、ミエルALと書いてある、木の幹のところです。それが今はLINEのグループで運営しています。LINEはとても気軽なものなのですが、でも今、地域のお母さんたちが中心で250人ぐらいですか、つながっていて、ほかにその中にやっぱりコアメンバーが20人ぐらいいて、そのコアメンバーと一緒にやっています。基本、ボランタリーです。

なので、今この木の中に、例えばシニアのお出かけミエルというふうに下のほうにあるのですけれども、今日も水曜日なのでミエルの中で、シニアの方たちが集まって活動されていると思います。

カレンダーです。カレンダーも今お手元には11月と12月と2枚お配りしたと思うのですけれども、大ざっぱに言うと、月曜日と水曜日はシニアサロン。木曜日に乳幼児のお母さんたちが集まる時間。月曜日と金曜日の夕方は、放課後ミエルといって放課後の子供たちが集まったり。土日はいろんなイベントをやったりというところで、例えば今日はとても忙しい日で、午前中はシニアサロンをやっていて、午後は今日はフードパントリーやります。

ミエルの里というふうに書いてあるのですけれども、こちらが不登校のお子さんたちの居場所づくりで、その子たちは今日は二宮のほうの吾妻山に登りに行っています。

そんな形で、でもそれを基本ボランタリーで、でも若い人たちには本当に少しだのですけれども有償で動いてもらっています。

これが今日のシニアサロンの様子です。まさにこんな感じで、近隣のシニアの方たちが集まってくれています。これは横浜市の生活支援補助事業のサービスBという制度を使っています。制度といっても年間で180万円ぐらいの事業になりますので、これで何とか家賃が払えているというところです。こちらが食事の様子です。温かい食事を皆さんで食べていただくと。この日はちょうど高齢・障害支援課の担当者が来ていたり、地域ケアプラザから生活支援コーディネーターが来ていたりということで、ここでちょっとした相談や心配事などがつながるようになっています。

後ろのほうにピアノがありますけれど、ピアノを弾いてくれるボランティアさんもいて、またちょっと戻りますけれども、こちらの中には例えば司法書士さんや行政書士さんみたいなボランティアさんもいて、ちょっとした相談に乗ってくれたり、スマホの使い方を教えてくれたりみたいなことも、ここで過ごしていただいているです。

こういうシニアと一緒に、一緒にというか時間をシェアしていますけれども、例えば妊婦さんが集まる時間があったり、赤ちゃん連れのお母さんたちが集まる時間があったりしています。

その赤ちゃんたちが大きくなつて、今度は乳幼児の時間というところで、お母さんたちは、これは自主保

育、自主保育のような形でここで伸び伸び遊んでもらっています。

でも、ここだけではちょっと足りないので、みんな遠くまで、例えば碑文谷公園にポニーに乗りに出かけたり、元町のほうにパンを買いに行ったりみたいなことを、みんなでベビーカーを押して、いろんなところに散歩に出かけています。

その中で横浜市には農園付公園という仕組みがあって、近くの師岡のほうでやっているのですけれども、師岡の畑を今借りていて、そこで親子での農体験というところ。月に2回、集まってやっています。ここで取れた野菜を先ほどシニアサロンで出したりみたいなこともつながっています。

こちらは放課後ミエルという、今、月曜日と金曜日の放課後に子供たちがわらわら集まってきて、やっぱり放課後の子供たちの居場所が、それも自由な居場所がないねという、地域の人たちのやっぱり課題感というか思いから、そういうところをつくりたい。つくりたいと思ったものをこういう場所でやれるというのが、私たちの緩さと自由さというか、でも、それが結局一番、先ほどNPOの自主性というお話もあったかと思うのですけれども、やりたいことをやれる場所を私たちが提供することで、若い人たちもどんどん活動してくれているなと思います。

この日は、今度は子供たちがいろんなやりたいことを作戦会議で話して、ボードゲーム大会をやりたいとか、Switch大会をやりたいとか、駄菓子屋をやりたいとか、そういうのを、子供たちがやりたいことを大人たちが何とか横から支えるみたいなことを毎週やっています。

この写真、ちょうど、なんと自民党総裁選をみんなで見ている写真なのです。高市さんと岸さんがいますけれども、でもこういうことも、私たちは決して既成観念を最初から渡すのではなくて、子供たちが自由に考える、そういう場所をしっかりとつくりていきたいなと思ってやっています。

こちらは、やっぱりあの中では收まり切らない子供たちが、追いつかけっこはとにかく好きです、走り回りたいという、何かそういうものをいつも持っているなというふうに子供たちを見ていて思います。なので、この日は新横浜公園で逃走中をやったときの写真です。私たちが用意するのはこのビブスです。あと、追いかけてくれる元気な大学生とか大人、真剣になって遊んでくれる大人に私たちは声をかけて、ルールは子供たちがつくるというところで、そういう子供たちが考える、子供たちの居場所をつくっています。

そうすると、こんなふうに、ふだんはもうごちゃ混ぜです。乳幼児から小学生の高学年まで、この場所、本当に来ていただくと分かるのですけれども、とってもちっちゃい狭い場所ですけれども、ここでごちゃ混ぜで、でもそれを地域のボランタリーな大人たちが支えてくれています。

最近やっぱり、このフリースクールなのですけれども、放課後の子供たちの居場所がないという、やはり地域の方たちのそういう発意からフリースクールを始めることにしました。この写真は、ちょうど今日と同じ水曜日なので、シニアサロンをやっている日なのです。なのでシニアサロンのシニアの方たちと一緒に、鶴見川の脇でお花見をしようということでやっているところの写真です。

基本的に、フリースクールといつても、子供たちがなかなか、今、学校に行っていない子供たちは家に閉じこもっているので、外に行ったり体験をするということがどうしても減ってしまう。それを、できるだけ今日のように山に行ったり、畑に行ったり、公園に行ったりということで過ごしています。

それは今、学校と連携が取れているので出席扱いになっています。そのうちに、やっぱり学習もちょっと心配だよねということで、今は火曜日と金曜日に学習支援も始めています。

そうやって、いろいろな地域の子供たちを見ていたら、やっぱり子供食堂をやりたいよねというのが、これはコロナの前の、これもやっぱり地域の人たちからの発案です。そのときに1日60食の御飯を作つて、夕飯です、みんなで大家族のように食べるということを1年ぐらい続けました。

このときにたくさん御飯を食べて、こちらの写真の下のほうで赤ちゃんを抱っこしてもらっている写真があるのでけれども、ボランティアの方たちに赤ちゃんを抱っこしてもらったお母さんたちが、今は先ほど言ったような活動のボランティアの中心になってくれています。何か、その辺りもやっぱり活躍してもらう、みんなに活躍してもらうときの、すごく肝かなと思います。本当にお母さん、先ほど数字でも出ていたように、何かをやりたい、地域に関わりたいと言っている方はたくさんいらっしゃると思います。だからそこは担い手不足というよりもつながり不足なんだろうなと思うので、つながりのいろいろな機会を私たちのようなコミュニティカフェのいろいろなきっかけの中で、つくっていけるといいのかなと思っています。

子供食堂も、コロナでどうしても続けることができなくて、今はフードパントリーというのをやっています。フードパントリーというのは、今、独り親を中心に戸食を渡す事業なのですけれども、月に2回、今日もちょうど第一水曜日ということで、シニアサロンが終わった後、また部屋がこんな形になって、今は45家族分ぐらいの戸食を分けて用意して、大体シングルマザーたちが多いのですけれども、仕事帰りにこの戸食を取りに来てくれます。お弁当も月に1回作っています。もう、お弁当は今110食ぐらいになっています。

こういうことも、実際にはフードバンクさんとの連携とか、あと今こども家庭庁が独り親支援のための補助金などを出しているので、私たちはもう、せっせせっせと申請書を書いて、報告書を書いてというところで準備する。だけれども、それをまた地域のボランティアさんたちがしっかりサポートしてくれて、準備してくれるという流れになっています。

そうは言っても、私たちのような活動が、本当に小さい場所なので、それでできることというのは本当に限られている。だったら、もう少し広く港北区内の同じような活動をしている、港北区子ども若者支援団体交流会というのを立ち上げて、お互いに支援の、お互いの支え合いをしようということで、ネットワークをつくりました。3年前ぐらいです。

今、お手元にこの絵のマップをお配りしています。こういうマップを作る過程で、やっぱりいろいろな団体さんとの連携もできますし、また区のこども家庭支援課さんとか、そういうところとの連携もこのマップを作ることでできるようになりました。社協さんです。

今度、市域というところで、よこはま・子ども若者が孤立しない地域づくり研究会というのを2024年から始めています。この辺りもやっぱり地域でいろいろな子供たちに会つて、そこで課題感を持ったときに、じゃあそれをどんなふうに解決していったらいいんだろうということを、ここでみんなで研究する。やっぱり、私たちも小さい場所で、実際に対面で困り事、困難家庭に会つて。それをじゃあどうしていったら、もう少しそれを解決にはならないだろうけれども、つないでいけるんだろうということをみんなで考えられる。そういうそろそろ研究会です。

これが今、私たちが考えているネットワークの形です。19ページになります。すみません、なんか。例えば真ん中にフードパントリーがあるのですけれども、そのフードパントリーにつながっているのは小・中学校であつたりスクールソーシャルワーカーであつたり、地域ケアプラザ、社協というところとつながりながらフードパントリーを運営し、それは区役所であつたり、こども家庭支援課さんであつたり、あと区の区民活動支

援センターみたいなところにも、区域ではそういうふうなつながりがある。市域では都市整備局だったり、健康福祉局さんは先ほどのサービスBでつながる。市民局さんは今、協働提案などをやっている、そういうところとつながる。こども青少年局さんは私たちは今、ヤングケアラーの支援などを受けています。

先ほどの研究会であったり、コミュニティカフェ、ネットワークという私たちのようなカフェをやっているネットワーク団体だったり、横浜プランナーズネットワークのような市域のネットワーク、市民セクターよこはま、それがまたぐるっと回ってきて、いろいろなところとのつながりを、また自分たちの活動の中に取り込んでいくということを、ここをぐるぐる回っているのが今の私たちの活動です。

なので、先ほども手塚さんのほうからコーディネート、つながりが大事ですよねというお話は本当にそのとおりで、私たちはこのつながりがあることで、今までのような活動を進めることができていると思っています。

やっぱり、こういう地域のつながりづくりで、じゃあ行政の皆さんと私たちでどんなことができるんだろうということを考えると、やっぱり本当に相互連携というところで、コーディネートというところだと思うのです。やっぱり行政には制度はあるし、やっていただいている。だけれども、それが実際にじゃあ困難家庭のお母さんがそれを知っているかとか、つながっているかというとそこが難しかったりする。

民間は民間で、一生懸命小さいところで、日々困難家庭、シニアの方たち、いろんなところとつながっているだけれども、じゃあそこで困ったままになっていることも実はある。だからそれをうまくつなぐコーディネート機能みたいなのが、本当に必要だなと思います。

先ほども自治会の成り手不足だったり、地域でのつながりが減っていますよとか、行政サービスも3年で異動になってしまったり。でも、やっぱりそこもコンプライアンスの強化というふうになると、どうしても地域とつながることも減ってしまいます。

でも、そこで私たちとしては、ぜひ連携をしていただければ、そのところは私たちの得意なこともありますということもお伝えしたいなと思っています。

2番のところの官民連携への期待というのはそういうところです。1番に行政の制度はあります。利用率もアップしています。でも、それを民間が当事者に翻訳するというのは、私たちは多分その機能は担えるだろうと思います。

先ほどの民間同士の連携であったり、あと制度につながりづらい困難家庭というのが、私たちは日常的に継続的な伴走ができると思っています。その辺りは最後に書いてあるような、何か、私たちのような居場所が得意なんだろうというふうに動いていて感じています。

こここのところで、22ページなのですけれども、行政の制度というのは、本当に具体的な解決を目指すアプローチで、本当に重い課題みたいなところは、それは行政にやっていただきたい。

だけれども、そこに至る前の困り切らない前の家族の支援というのは、私たちはつながり続けるということのアプローチの中でやっているんじやないかなと思っています。その得意不得意というか、そういうところはお互いで補完し合いながらやっていけたらよいなと思っています。

ここは、先ほどから繰り返しあ話ししていることなのですけれども、例えば子供食堂は、でも、たくさんの若い人たちが、協力してくれています。若い人もつながりを求めています。若い人がそういうところに参加してくるというのは、やっぱり動機的には楽しいこと、その彼らが主体になれること。そこはすごく大事だと思います。やはり若い人の場合は報酬も必要です。

今、短期的には65歳から75歳での運営というふうに言っていますけれども、そのアクティブシニアというのもすごく大事で、私たちのところも本当にその世代の方たちがしっかりとサポートをしてくれています。それプラス、若者世代がプロジェクトベースで、これなら手伝えるよ、こここの部分だったらやれるよというところの参加はいいかなと思いますので、次世代の社会参加への仕組みづくりというふうに書いてますけれども、若い人たちがそこへどう入ってくるかというのはいろいろな工夫があると思います。

2番目の自治会再生については、港北とか青葉区なんかでは今、自治会と民間活動団体が一緒に何かをやることに支援金を出すというような制度を運営しています。それは私たちがコーディネーターとして入って、大体2年前ぐらいから、いろいろな地域を区の担当者と回って、会長さんと会って、そのときやっぱり、さつきもありましたけれども、行政の方が一緒に動いてくださる、一緒に後ろ盾になってくださると、会長さんたちは耳を傾けてくれますし、いろんな可能性が広がると思います。

3番にカフェ型中間支援と、私たちがやっていることも中間支援の一つで、なので、そういうことの協働事業を、実は2015年から2017年にやりました。その協働事業の結果で、コミュニティカフェのネットワークができていたり、そういうカフェ同士の対話の継続ができていたりします。

このチラシなのですから、とっても分かりやすい気が、でも、こういうのを作るのは民間はすごく得意なのです。こちらは、港北区の地域のチカラ応援事業の、実際に今動いている事業です。イベントや担い手に困っている町内会さんと、逆に地域で活動している団体が、麦踏み体験というのを真ん中にして、一緒にお互いの課題を解決できるのです。

麦踏みをやっている団体さんは、もっとたくさんの人にこの活動を知ってほしい。みんなに参加してほしい。じゃあこれを町内会さんと一緒にやつたらどうだみたいなのがマッチングをしました。

お隣は、シニアヒップホップダンス。こちらもとてもいいこと、シニアのヒップホップってすごくシニアにとっていいぞと思った代表さんが、じゃあこれを地縁組織、自治会や町内会さんと一緒にやつたらどうだろうということをやって、でもそれを受け止めてくれる町内会さんがいてというところで、こんな形でいろいろなマッチングが進んでいます。

今、そういったつながりづくりから、今度地域づくりへというところで、それが少し広がっていくことで、先ほどの港北区子ども若者支援団体交流会であったり、あと、よこはま・子ども若者が孤立しない地域づくり研究会であったり、そういったことは、結局のところ各団体同士の相互理解というか、お互いがどんなことをしているのかということがどのくらい理解できるかというところはすごく大事なところで、なので、やっぱりそこは対面の対話であったり、マッチングであったりというところは大事だと思います。

こちらの絵がそちらになるのですけれども、行政には制度がある。民間にも頑張っている人たちがいる。お互いが相互理解する、お互いの協力、協力者理解というような、それを今、相互連携からコーディネート、3番に相利のプロジェクトへというふうに書いているのですけれども、相利というのは本當にお互いの利益をお互いで理解して目的を達成していくうといふものなのですが、今、私たちは去年、港北区ではこの相利については松原明先生の講義をいただいて、2回のワークショップをして、相利をみんなで考えるワークショップをしたことで、町内会とNPO、またそのほかにも、区役所みたいなところがお互いに必要なこと、目的を一つのプロジェクトで達成していくというようなことを進めました。

なので、そういった工夫、やり方はいろいろあると思います。なので、また、そういうことも一緒に考えていただけたらいいのかなと思っています。

最後も課題になりますけれども、とにかくまだまだ地域に居場所は足りないと思っています。先ほどあつたように、やりたい人はたくさんいます。コロナの後、本当に私たちのところに見学に来られる方もたくさんいらっしゃって、私たちも、こういうことをやりたいのです、地域にこういう場所をつくりたいのですというお話はよく聞きます。でも、やっぱり、そこに例えばコーディネーターの派遣であったり、そこは様々な支援の工夫があると思います。

また、そうやって居場所、先ほどのような本当にごちゃ混ぜの居場所、もう重層的なのです、活動が。子供・シニア・障害・貧困、それを全部ばらばらな福祉的な補助金や助成金なんかで私たちは運営しています。

今頂いている健康福祉局のサービスBは、そういう意味では本当に全体の中で活用できる、とてもいい補助金だと思っているので、ただそういう部局間をうまく連携できるような、そういう支援というのがあると、こういう重層的な居場所というのは今よりも増えていくし、支援も手厚くなるかなと思います。

私たちは今はそういうことでは、例えばNTTデータ経営研究所の孤独・孤立の調査事業であるとか、共同募金会の緊急助成とかそういうのを取りに行って、でもそれもとても選定のハードルは高いです。書いては落ち、書いては落ちで、最後には報告書に苦労してというところを。それは、今はやれるけれども、だけれどもじゃあ次の世代ができるかというとそこは難しいんだろうなというのは思います。なので、今のうちにこの仕組みをうまくつないでいけたらなと思っています。

御清聴ありがとうございました。本当によかったです現場にぜひいらしてください。ありがとうございました。
(拍手)

- **麓理恵委員長** 鈴木様、ありがとうございました。

それではお2人の御講演が終わりましたので、質疑に入ります。

- **越久田記子委員** 本当に、貴重なお話をありがとうございます。もう本当に現場の声というか、積み重ねてきたこと、そして熱い思いをすごく感じました。本当にありがとうございます。

私がから伺いたいのが、活動される中で、行政と様々なやり取りであったり、連携があつたと思うのすけれども、行政からの支援という形で聞くのがいいかなと思うのですけれども、行政からの支援として、どんな支援がうれしかったかという点と、あと、もっと、こんな支援があつたらよかったですなということを、それぞれ教えていただければと思うのが1点と、やっぱり、鈴木さんのお話の中で継続していくのがすごい大変というお言葉がありましたけれども、様々な活動があると思うのですが、立ち上がっても、持続可能にしていくことと、持続可能性を持ってやっていくことはすごく必要かなと思うので、その持続可能にしていくためにどうすればいいかみたいなところの御見解をお聞かせいただければいいのと、その中で例えば行政には、ここをもうちょっとこうしてもらえばいいなというようなことがあれば、教えていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

- **麓理恵委員長** では鈴木様からお願ひいたします。

- **鈴木参考人** 支援というところで、私たちも本当にお金だけじゃなくて、やっぱり先ほど後ろ盾と言つたのですけれども、お墨つきが頂けるとか、そういうことでも本当に大きくて、あと実際に区の方たちが私たちのところへ来てくださって、活動を見てくださって、応援していますよと言ってくださるだけでも頑張れるというところはある。

なので、やっぱり活動をよく知っていただく。よく以前、新人の方が港北区にいらしたら、その方たちを連れてこういう場所を、こういうところがあるよというふうに見せに来てくださった職員さんなんかもいた

のですけれども、何かそういう活動団体と一緒にやっていきたいよという、そういう思いがつながるとうれしいなと思います。

持続可能というところでは、本当に拠点の運営については、結局のところ、家賃が最後に本当に払えなくてとか、場所が見つからなくてとか、それはコミュニティカフェも本当にできては消え、できては消えというところはあります。

でも、それが横浜の場合、例えば児童館がないとか公民館がないとか、そういうところを補完しているんじゃないかなと思うので、補完しているというところを、何か持続可能なところにつなげられるのか、あとは実際に例えば地区センターとか、コミュニティハウスとか、ある場所をうまく使えるような何か仕組みたいなのもあるとよいのかなと思います。

○ 麓理恵委員長 手塚様、いかがでしょうか。

○ 手塚参考人 私も同じで、やっぱり行政とのやり取りの中で、お互いをしっかりと信頼し合う。つまり、もしかしてと、もちろん疑う場面はいろいろあると思うのですけれども、できると言ったらできると思ってあげるみたいな関係性が行政とあると、逆にできないことをできない言いやすくなるのです。やっぱり市民活動団体さん、私も間に入って、それを答えちゃって大丈夫というようなことも時々あるのですが、できないことはちゃんとできないと言ってくださいと。それは行政にも言えて、頼まれると、ついいい返事をしがちなのですが、やっぱり、そこはしっかりと、できることとできないことは、お互いにちゃんと言い合うだけの信頼関係を保てると、すごくスムーズに物事はいくと思います。

そもそも、行政のロジックと民間のロジックが違うことは分かっているので、企業とも同じなのですけれども、そこはしっかりとお互いにちゃんと言ってくださいねというのを言いながら、私たちもできることはできないというのを答えるようにはしています。

それから、私たちの組織もNPOとしてはもう25年選手で、かなり継続するのが大変になっているのですけれども、やっぱり今おっしゃっていただいたように箱物を、藤沢の法人は箱物を運営しているのですけれども、そこはそこで運営はできるのですが、それだけだと、そこにだけいろんな解決を求めてきちゃうので、自主事業をかなりしています。

今、半々ぐらいでしているのですけれども、そうすると、逆に言うと本社というか、自分たちがきちんと事務仕事をする場所が必要になってくると、お家賃はどこからも出ないので、そういうものを取るために、会員さんへの負担がどうしても多くなったり、請負業をしたときも、法人税を払うと言ったときに、私の前の前の理事長が、それは会費で払うんだと言って会費を値上げしたりしましたけれども、皆さんしっかりと意思を持って払ってくださっているので、一応法人税は会費から払うを私は厳命だと思って、今でもやっています。

それを、メンバーも信頼関係でつながっているというのが、もしかしたら持続可能な、やめるときも会のほうは結局メンバーとのやり取りなので。なので、もちろん受益者さんがたくさんいるときは、やめるにやめられないという事情もあると思うのですけれども、私は、やっぱり会として自主自立の精神でやるということを、その会が続けていれば、持続可能にしたければ頑張る。それは譲り出すのであれば、違う団体にお仕事を代わってやってもらうというように柔軟な発想をしてもらえると、事業そのものは持続可能になるんじゃないかなというふうには思っています。

○ 越久田記子委員 ありがとうございました。

○ 黒川勝副委員長 先ほど手塚理事長のほうのお話の中で、2025年度の強化案件でNPO法人の解散というのがあったのですけれども、これは僕も非常に残念な話なんだろうなと思いながら聞いていたのですが、やっぱり横浜だと、ヨコハマ市民まち普請事業みたいなものなんかにエントリーされて、第1世代といいますか、最初につくったときの人たちというのは物すごく、やっぱり、やる気にも満ちあふれていて、年齢的にもまだ頑張れる年齢だったりして、そういう中で頑張ってらっしゃっていて、それを次の世代に引き継ぐのが結構難しいのかなというような感じもするのですけれども、そういう扱い手だったりですとか、あと解散の相談を受けたときに、例えば、解散するのは簡単だけれども、ちょっと待ってみたいな形で、こういうところに、例えば今、言われた事業の引継ぎみたいなことだったりですとか、あるいはどこかと合併してみたいことだったりですとか、あるいは人材を引っ張ってくるためのノウハウみたいなものをいろいろと提供してあげたりだったりとか、そういう形で解散しないで何とか継続する方法を見つけてましょうみたいな、そんなアドバイスも、解散の相談があったときにはされていらっしゃるのか。

あるいはそういう中で、何かまた解散を引き止め、解散するのをやっぱりとどまつて、もう1回頑張ってみようよみたいなふうになるようなケースもあるのか、そういう辺りを少し教えていただけますか。

○ 手塚参考人 もしかしたら、私がこれから答える答えは継続という言葉の理解の、考え方を違うように言っちゃうかもしれないのですけれども、私としては、NPOはもともと、地域の課題を解決できたら解散するのです。だから、解散はネガティブではないのです。要するに、もう課題がなければ、私たちいなくていいのですよねということなのです。

となると、何が起こるかというと、でも実際の解散の相談は理事がいない、会員が減った、お金がなくなったというのが現実です。でも、解散するという決断をしたのは、私はいいと思うのです。NPOの定款を見ると、一番後ろの附則のところに、法人でしかれども、附則のところに創立者の名前がずらつと並んでいます。一番最初の理事は全部名前が載っているのです。それは一生、その法人があれば残ります。

私は、若い方たちが今NPOをつくりつつあります、一般社団も含めてですが。そのときに同じような事業を、やっぱり思いつくわけです。でも、そこがあって、要するに頭打ちになっている状況も実はあったり、そこにしっかりと御挨拶に行かないとできなかつたり、NPOではそういうことはないはずなのです。

別に上下はないですから、中間支援だって平場にいる。みんな上下はないから、ヒエラルキーの組織ではないので。

だから、解散の理由はまず聞きます。もちろん、もうやることがなくなったのであれば、もう万歳の解散ですし、そうでないのであれば、その事業の受益者が困らないような状況さえつくれれば別に解散もあります。上手に、やっぱりちゃんと解散してほしい。フェードアウトしてほしくない。解散には、実はお金がかかる。株式会社を解散するのと同じように、官報に公告もしなきゃいけませんし、10万ぐらいかかるので、その予算が残っているうちに、私はやめるならしっかりとやめて、次の新しい団体にちゃんと事業を譲り出してほしい。合併はもちろん結構ですけれども、やっぱりそういうふうに潔くNPOというのは組織として存在してほしいと思っている。未来永劫あるのがグッドではない世の中ではないかと、私は考えているからです。すみません、せっかく質問いただいたのにこんな答えです。

○ 黒川勝副委員長 そういう、引継ぎのコーディネートみたいなこともされるのですか。

○ 手塚参考人 もちろんです。

だから、例えば高齢者施設、高齢者の居場所支援をやっている。そこが立ち行かないとなつたら、その近

くで同じようなことをやっているところを探したり、新しくやろうという相談があったところを探したりして、そこにノウハウを移転してくださいと。法人を継続するんじやなくて、こっちの法人はある程度続けてもらって、新しい法人をつくってもらって、ある程度こちらが軌道に乗るまではノウハウ移転をしていただいて、変な話ですけれども、残余財産もなんなら寄附してあげてくださいというサポートはします。

NPO法人の数は、ピークで5万2000あったのが、今は5万を切っています。でも、そもそも5万が適正な数なのか、2万が適正な数なのかというのをちゃんと考えていいかといけないんじゃないかなと思っているので、今はいろいろなことが起こっていますが、それも現代社会には必要なことではないかと。呼吸するように吸って吐いてなんではないかなと思っています。

- 黒川勝副委員長 解散ということがとてもネガティブじゃないというようなことが分かったので、すごい勉強になりました。ありがとうございました。

あともう一点だけ、例えばNPO法人の大倉山ミエルさんなんかの場合は、いろんな事業をどんどん次から次へとやってらっしゃるというような印象なのですけれども、その中で解散とは逆ですけれども、独立してまたNPOをつくろうだとか独立してまた別法人にしようだとか、そういう動きなんかに対してはどういう対応をされるのか教えていただけますか。

- 鈴木参考人 本当にそれは理想だというふうに私も思います。例えば、先ほどの不登校のお子さんの居場所をつくっている若い方たちなんかは、またそこはそこで新しい事業としてしっかり立ち上げていかれるのを、私たちは、ふ卵器的なところで応援していて、多分それが新しくできたら、それは私たちもまた横から応援するということもできるんじゃないかなと思っています。

- 青木亮祐委員 大倉山ミエルの鈴木理事長にお伺いさせていただきたい。

御説明ありがとうございました。

3ページでミエルの木と、大きな木に並べて、たくさんの、シニアから、お子様から活動されていると思うのですけれども、2009年ですか、立ち上げが2009年と先ほど御説明があったと思うのですけれども、その頃は多分、今よりも子供食堂ですか、居場所とかに対して、行政も非常にそこまで何か強い気持ちを持って取り組んでいなかった頃だと思うのですけれども、大きな木になるためにはもちろん起業もそうですけれども、まず入り口の部分って物すごく大切で、先ほど御説明があったように、こういった活動をしたいところがあるのですけれども、できては消え、できては消えという今、現状の中で、何を一番大切に、どんなことをされていろんな今の状況に至っているのかというのをお聞かせいただきたいなと思います。すごいスタートの部分は、すごく大事だったんじゃないかなと思うのですけれども。

- 鈴木参考人 実はミエルが2010年に立ち上がったのですけれども、すみません、でも2010年というのはちょうど政権が鳩山政権のときで、コンクリートから人へというふうに言われたときで、そのときいろいろな起業塾なんかもあって、私たちがカフェを立ち上げたときは、そういう起業のためのノウハウを教えてくれる塾というのも、割とたくさんあったと思うのです。その後も何年かはあったと思います。

あとは、立ち上げは商店会さんと一緒にやりました。横浜市さんも関わっていましたし、というところで一番最初の例えばイニシャルコストのところは、私たちは払わなくても立ち上げることができたのです。大倉山の商店会さんが蜂蜜の養蜂事業を始めるということで、そのアンテナショップとして始まったので、だからそういうきっかけとか、ちょうど私がそのときに起業塾に行っていたとか、あと地域の人たちと何か始めたいねという、何かそういう人たちとのつながりがあったとか、幾つかのラッキーな要因が重なった

と思うのです。

でもそこから始まりながらも、でも私たちの一番最初からそういう地域の居場所をつくりたいという思いはずっとあって、それを15年維持しながらやっているのですけれども、もうその15年の間で一番私たちが思うのは、やっぱり主体は何かをやりたい、活動をしたいという人の中にあって、私もその一人ではあるのですけれども、なので、ボランタリーな組織なので、そのボランタリーというのはやっぱり主体性というところが一番大事だと思うのです。

なので、いろんな人がやってきて、こんなことをやりたいんだ、あんなことをやりたいんだというのを、しっかりとそれをやっていただくためのプラットフォームみたいのがコミュニティカフェ、今はそういう場所、拠点だったりするのです。なので、やりたいことがやれる場所をつくっていく。それをしっかりと周りから応援するというところの継続なのですけれども、でもそれを行政の方たちにも伝えながら情報も発信しながら応援してもらっているながらというところで、いろんな何とか15年続けているかなと思うのですけれども。

- 青木亮祐委員 15年って、結構長い、ずっと努力をいただいているかと思うのですけれども、やっぱり、こういった活動をしたいと思っている方は結構いらっしゃっていて、だから何か、単一の、じゃあちょっとだけ子供食堂をやってみたんだけれども、なかなかそれでボランティアさんも見つからない、やりたい気持ちはあったんだけれども、ほかの活動にも広がらないと言って、結局活動休止になっちゃう団体さんも結構いるのですけれども、本当にやりたいと思っている方々に、我々の政治の立場でしたり、行政の立場でしたり、そういうことで、スタートのときに何かしてあげられる支援とか、寄り添える何かがあればお教えいただきたいなと思うのですけれども。

- 鈴木参考人 確かに、スタートアップはいろいろな形で実はあるとは思うのです。例えばこども青少年局さんが出している子供食堂の支援金なんかも、今は年間だと24万円ぐらいまでは出していただけるので、ただそういうものをうまく取ってくる、そういうノウハウであったりとか、その書類を書くことも、先ほどちょっと手塚さんが建築の話をされたのですけれども、私たちは、実は建築の仕事をしていたので、比較的そういう書類を書くとか、行政とやり取りをするとか、そういうのはもしかしたら得意なのかもしれません。なので、例えばそういうことを支援する、私たちが何かお手伝いするみたいなことは、コーディネーターとして何かお手伝いするということはできるかもしれません。

そういうことを最初から何もかもできるという人たちは、本当にいないと思います。私たちも一番最初に本当にカフェを始めたときに全くの素人で、どうやってやろうとやって、中小企業診断士さんに相談したり、商店会の方と考えたりということはしたのですけれども、やっぱりそういう横からおせっかいをしてくれる人たちを、逆に、その支援をする人を支援していただけたらよいかなとは思います。ありがとうございます。

- 青木亮祐委員 ミエルさんのような、何かちょっと心温かいようになるような活動が、いろんな地域にできればいいなというふうに今日は思わせていただきました。ありがとうございました。

- 柏原すぐる委員 どうもお話ありがとうございました。ぜひ山中市長に聞いてほしかったなと思いました。
- 私のちょっと個人的な話から言うと私も実は建築学科卒業で、その点が一緒ということと、私も非営利セクターになるのですが、スポーツ団体を七、八年ほど運営していて、なかなか非営利で続けていくことの大変さというのも少し感じているところです。

お2人にそれぞれだらだらと質問させてください。まず手塚さんなのですけれども、ボランタリー活動相談ということで、20名以上の方が相談員をされているということで、こういった方はどんな方がいるのかな

とか、結構継続的にやってらっしゃるのかとか、そういった特徴がもしあれば教えてもらえますか。

- ◎ **手塚参考人** 端的に言うと、地域をよく知っていて、人の話が聞ける人ということになります。特に知識としては、やっぱり生活の中で覚えた知識も十分使えるので、そこもある程度自分でそしやくをしながら伝えることのできる人というふうになると思います。

それとあわせて、相談内容のテーマだったり、それから、やっぱりどうしても組織支援みたいなところもあそこの相談窓口は多いので、しっかりとそういう情報は自分の中で学習をして、それをきちんと継続して新しい情報をアップデートしていくことのできる方、つまり、あまり固定観念を持たないというのは、相談員の心得ではないかというふうには考えています。

どういう人がいるかというと、ある程度お仕事のというか、お世話係をしていたようなお仕事をしている人が多くて、NPOの中でも代表になっている人ももちろんいますし中間支援組織というところにいて、フリーになった方もいますし、実は行政の卒業生もそれなりにいます。ソーシャルコーディネートかながわの中には、横浜市役所を卒業した方も何人かいらっしゃいますし、ある意味、意外とオールマイティーに、何にでも興味を持つ人というのが、割と相談員に向いているかなと思っています。

若い方も、それから逆に専門相談員というのも実はいて、ここに特化しているという人たちも何人かそろえていますので、例えばITに強いとか、広報のチラシを作ったら物すごくテクニックがいいとか、私は一応設立支援というところに名前を載せてもらっているのですけれども、そのほかに土業の関係の先生方にも実は御協力をいただいて、会計・税務、それから雇用、いろんなやっぱり法律に明るい先生方にも御協力をいただいているという状況ではあります。

- **柏原すぐる委員** 御丁寧にありがとうございます。

別ですけれども、経験値と学習値が反比例するという話で、その中で、2、3年では無理ということで行政職員は異動が早いよねというところと、あと戸塚区の例で、私もすごい同意しているのですが、戸塚区は民間委託、あれは活動支援センターのほうだと思う、私も1回視察で拝見しまして、やはり一定の継続性を持つことが重要なと思うのですけれども、その辺りをもう少し解説をいただけると幸いです。

- ◎ **手塚参考人** 私も昨日たまたま区活の研修ということでやらせていただいたのですが、3回やったのですけれども、結局3回とも参加した人が違う人がお見えになっていて、それはそれで一つのやり方だと思うのです。ただ、3回同じ研修したわけじゃないのです。少しづつでも積み上がるようという、バッファというか少し重なる部分をつくりつつやったのです。

でも、やっぱりある程度、横浜の研修は、その前の教育委員会、今でもそうだと思うのですけれども、区活の中には教育委員会から来ている方と、市長部局から来ている市民局から来ている方と両方いらっしゃるので。教育委員会のほうの研修というのもやったことがあって、そのときも初任者研修・中級者研修みたいな相談員の研修をやったのですけれども、この人たちはどこで相談を受けているのですかと言ったら、区活で受けているとおっしゃるので、ああ、そういうところが別々に研修しているんだなというのをちょっと思いました。

ただ今回は、両方の局から依頼を受けましたので、あまりあちこち言わずに両方来たので、それはとてもよかったですかなと思いますが、職員の方も、やっぱり、向き不向きがきっとあるので、好きな方はどんどん覚えていただくので、学習値が8割で、経験値は2割でもできる方もいるのです。

でも、そうではない方も、やっぱりいろんなパターンの方がいらっしゃるので、学習は一生懸命している

けれども、経験がないから対面でなかなか伝えきれないという方もいらっしゃるので、その辺りも実は少し加味しないと、対書類は何とかなるのですけれども対人なので、そこがちょっと難しいところかなというふうには思っています。

- 柏原すぐる委員 重要な示唆をありがとうございます。

続いて鈴木さんのほうに御質問なのですけれども、私も横浜生まれじゃなくてよそ者なのですけれども、多分、鈴木さんもよそから、藤沢ですけれども、多分港北は縁があって多分いらっしゃって、こちらで立ち上がってということで、よそから来たけれども根差す要素というか、何かあったんでしょうか。お伺いします。

- 鈴木参考人 私も例えば大学のときは建築をやって、まちづくりというと本当に横浜のまちづくりというのは、憧れるというか、田村明さんの六大事業であったりとか、そういうところは見ていて、やっぱり横浜の魅力みたいなのは感じて横浜に住んでいると思うのです。

周りを見ても、横浜の場合、もともと住んでいたという人は本当に少なくて、みんなやっぱり集まってきてここで暮らしているという方たちが多いので、当初は確かに20年住んでもよそ者感みたいなのはあるのですけれども、でも例えば町内会の方たちだったり、地域の方たちが受け入れてくださる、そういう土壤みたいなのはすごくあるなと思いました。

確かに、15年前にそういうのを立ち上げたときも、地域の人たちがしっかりと応援してくださいましたし仲間に入ってくれたという感覚はあります。そこは横浜のとてもいいところなんじゃないかなと思います。

- 柏原すぐる委員 今、実は、ちょうど木の幹の絵があったと思うのですが、そこに企画部が二十数名いらっしゃるということで、ずっと長くいる方もいれば、新陳代謝というか出られる方もいて、どんな方がいらっしゃって、長くいる人はどうして長くいるのかなとか、それって教えてください。

- 鈴木参考人 そうですね、本当に、先ほど妊婦さんの写真があったかなと思うのですけれども、3人の妊婦さんが、結局2人は職場復帰をしていて、1人は残って今本当に活動の中心になって動いてくれますけれども、そのお母さんは子供たちが幼稚園なのです。あと、さっき言った2人は保育園から子供を預けて仕事をする、復帰をする。だけれども、復帰をしても何かのタイミングでは戻ってきてくれる。戻ってきてくれるというか、例えばイベントには来てくれるとか、今度お正月にお餅つきをやりますけれども、そういうときにはみんなが集まってきて、同窓会的になってくるとか。でも、育休中にしっかりと地域につながった人たちというのは、そこで地域との関係ができるので、なのでそこでまた、そういうLINEグループの中にもずっといるのです。

なので、ちょっと私たちが困ったときに、今度こういうことをやるんだけれども、これで困っているというのを投げると、ちゃんと返してくれるのです、その場、その場で。今度も例えば、よこはま夢ファンドに手を挙げたのですけれども、今度、よこはま夢ファンドをやるからね、みんな働いているんだから、しっかりと寄附してねみたいなこともどんどん発信できる。そういう関係性がずっと続いているので、お子さんたちも今は保育園でも小学校になり、中学校になりというところで、またそこはそこで新しい課題が出てきます。

それをまた戻ってきて相談をしていってくれたり、私たちが何かつながるところがあれば、つないだりというところで、やっぱり乳幼児期から一緒に地域で暮らす。そこが、そういう拠点がずっとあるということは、すごく大事かなというふうに、なので、継続は大事なのですけれども、頑張ります。

- 柏原すぐる委員 一応最後にしますけれども、学校との連携で、不登校の子供たちが出席扱いになってい

るということで、これは割と最近、これはどんなようなステップがあつて出席扱いになったか、ちょっと教えてもらえますか。

◎ **鈴木参考人** 学校とのつながりは、私たちも例えばちょっとした困難家庭のことをずっと校長先生に相談していたり、地域のケア会議なんかに私たちも出たりということで、もともと校長先生たちと顔のつながりがあつたりというのはもともとあって、今度こういうことを始めたのでというところと、あとやっぱり連携しているほかのフリースクールの先生たちが、先に学校と連携をされてたりというのがあつて、じゃあここもこういうふうにやりましょうみたいな、やっぱり、そこも、さつきあつたような信頼関係です。地域で長くやっていて、そういう顔の見える関係ができていてつながつたのかなと思います。

また、毎月毎月丁寧な報告を上げてくれるので、そこも大事なところかなと思っています。

○ **柏原すぐる委員** ありがとうございました。

○ **田野井一雄委員** 今日はありがとうございました。

私たち議員は、今日のお二方の話が、すばらしいお話だったと思うのですが、それが原点の私は活動ではないかと、自分自身にも今、言い聞かせておりますが、実はここの20・21ページに、鈴木さんのほうで地域のつながりづくりの現状と課題という中で、私は学生時代から子供たちを集めちゃ、三角ベースをやつたり、そういうことが大好きで、黒川さんもそうなのです。私も、青年会議所活動を10年間ぐらいやりまして、これは明るい豊かなまちづくりなのです。様々な委員会に分かれて議論を重ねながら横浜のまちづくりを、やはり、行政と市民の中間的なコーディネーターとしての青年会議所は、私はあると、こんなふうに思っておりますが、21ページに自治会役員の成り手不足、子供会の解散。実は私は、子供会港南区の会長ですが、全体の横浜市の副もやっているのですが、今は子供会を抜ける区が出てまいりました。おっしゃるとおりです。

少子化が今、日本では一番の課題だと私は思っているのですが、その中で、昔、私たちが子供の頃は、向こう3軒隣、袖すり合うも他生の縁ということで、隣の晩御飯、うちの晩御飯みたいな時代があったのですが、コロナで一転した社会情勢になったと思うのですが、こんなことで、まず成り手不足、自治会町内会ですら、今日は市民局もお見えになっています、加入率がどんどん減っていると、ゴミはどうすんだ、何はどうすんだと、それはそれみたいな今は時代背景にあると思うのですが、この時代背景において次の世代を担う子供たちに対して、これからどういう、これから今はAIがどんどん進んでいて、やはり字が読めても書けない。子供会では書道会もやっているのです。書道展もやったり、走り方教室もやったり、スケート教室もやったり、縁日と映画のタベと言っている、縁日があつたわけですから、そんなことを、昔ながらのイベントを今でも続けているのですが、そういう時代背景にあって、これから時代はちょっと厳しい時代背景かも分かりません。

そんなことで、新しい時代に向けて成り手不足というのは、本当に私は厳しいと。学校ですら、整理統合が始まっていますから、この辺のトータル的なことで、何かコメントがあれば、お二方からいただければありがたいと思います。

○ **麓理恵委員長** では、鈴木様からどうぞ。

◎ **鈴木参考人** ありがとうございます。

本当に町内会、子供会については私たちも一緒にNPOと活動で一緒に遊んでいる子供たちを、実は自分の町内会に呼んできて、お祭りでおみこしを一緒に担ごうよとか、今日はみんなと一緒に走ろうよみたいなことで声をかけてやっています。

それを会長さんたちも受け入れてくれていて、なので、この町内会じゃないと駄目だよとか、会費を払っていないと駄目だよということではなく、ここについては参加しよう、ここについては協力しようというような、そういうプロジェクトベースというふうにはよく言うのですけれども、そういうつながり方で、でも1回やってみると、あれ、これ楽しいぞとか。盆踊りも先ほどのヒップホップダンスの方が盆ダンスというふうにつくり変えて、今までの盆踊りではなくて、若い人たちが踊りたい盆ダンスをやったら、今まで来なかつた人たちがすごく来たとか、なので、本当に工夫とそこもやっぱり信頼関係だと思うのですけれども、まだまだ、地域がそれによって元気になるんだったら、それがまた自分の子供たちのためになるんだったら協力したいよと思っておられる方はたくさんいるだろうなというふうに体感として思います。

なので、うまい入り方、受皿というのがつながる、私たちと考えていることうまくつながると、何かやりようはあるのかなというのは思っています。もちろん、いろいろな町内会、いろいろな状況があるので、港北区の場合はすごく恵まれていると思います、子供も若い人も多いので、だけれどもそこでやつたことがまたうまく展開できると面白いのかなというふうには思っています。

それは地域防災を考えたときも、本当に大事なことなので、若い家族も防災という言葉では、やっぱりこれは何か今やつとかなきやと思うタイミングでもありますので、例えばそういう今までだったらお餅つきが先ほどありました。それはもう炊き出しの訓練になるという、そういう感覚がうまく伝わればいいのかなと思います。

◎ 手塚参考人 ありがとうございます。

もちろん人が減っているので、子供だけではない、どんどん減っていく。でも減ってその自治会町内会 자체がそのまま存続できるわけが実はないと思うのです。なので、すごく難しいと思いますけれども合併とか区域をもう一度考え直すとかで、実は町自治会町内会って、神社で分かれていたりとか、そういうちょっと違うロジックで分けられていることがあるので、そういう意味では、そういう編成そのものの再考を、要するに、思い出してください、そもそも、私が聞いた範囲では自治会町内会はやっぱり任意の団体ですし、強制的に物事を、命令系統の下にあるわけじゃないので、やめることも別にしようがないと思わなきやいけないような組織だと私は思っているのです。

実際に私は自治会町内会を今やっていますけれども、1000世帯ぐらい抱えているのですが、隣の20世帯ぐらいの町内会がやっぱりもう運営できないと言って御相談に来て、でも自治会町内会が嫌いな人もその20人の中にはいたので、入らないという人もいるのですけれども、その中の半分ぐらいの人は、私どもの自治会の会費を払うから、一緒にお祭りとかをやってほしいと言われたので、分かりましたと受け入れました。

そういうようなことも、統廃合もやっぱり起るんじゃないかと思っていて、そのときによく重要なのは、機械的に分けるんじゃなくて、さっき言ったように何でここのエリアなのかということを、しっかり理解をした上で提案をしてさしあげないと横暴になっちゃうので、民間のことなので、なので、そこはそのほうがいいだろうなというふうには一つ思っています。

もう一つは、そもそも経験がない人たちが、コロナのときに、ある方に役をお願いしに行ったら、今、会社に行っていない、行っていないというか在宅なので、いいよと返事をしてくれたのですけれども、そもそも町内会で回覧は回ってくるけれども、何をやっているか僕は知らないと。役員をやるのは別にいいけれども、エリアをまず教えてほしい、お役がどういうのがあるか教えてほしいと言われて、説明を行ったことがあります。3年ぐらい前です、コロナになってすぐですから。知らないんだと思いました。

だから、まずはしっかりとその今の現状を皆さんにお伝えして、知らない人が本当にたくさんいるのです。知らないものには近づかないですから人間、怖いから)。なので、まずは自治会はこういうものだ、町内会ってこういうふうに日本の戦争の後の話だからあまりあれですけれども、自分たちでつくった組織を、自分たちでやってきた歴史がある。でも、だから続けろとは言わない。でも知っていてほしいという何だろう、もともとのことを知れば、絶対何か興味は湧く。

もう一つが、私ども藤沢の団体で、学生のインターンシップを長期にわたってやっています。6か月ぐらい学生を集めて、それも手挙げで集めて、それをNPOに入れ込んで6か月間、そのNPOの人間として動いてくれ。報告書も出してくれとやっているのですけれども、そうなると、その子たちの社会的認識が変わってくる。実は自治会町内会に入れてもいいかなというふうにちょっと思ったりするのですけれども、自治会町内会は、若い人が欲しいと言っている割に、いきなり学生が来てもどういうふうにサポートしていいか分からぬのです。だから、ボランティアとして入る人のボランティアマネジメントみたいなことも、もしかしたら、ちゃんと自治会のセミナーのどこかに入れなきゃいけないんじゃないかなというふうにちょっとと考えているぐらいです。

なので、まず自治会そのものが、現実もっと、区分けも含めて現状の調査をちゃんとしたほうがいいと私は思っています。パーセンテージで上がってくるのは数字のマジックで、本当に5割なのか3割なのかというしか上がってこないので、あまり有効ではないと思っています。

だから、そういうことはまず、すごく必要だなと思って、成り手は、もしかしたら私も今、困っている成り手もいますけれども、でも探しはあるんじゃないかと思っています。

鈴木さんが言ったように、命に関わればみんな動きます。だから、防災をしっかりとやるためにバックアップ組織だというようなイメージも、もっときちんと皆さんに伝えることが重要ではないかと思っています。

継続のときに何がネックか、始めるときに何がネックかという話を先ほどなさっていましたけれども、やっぱりバックオフィス機能というのがとても皆さん苦手なので、どこかで手伝ってあげる仕組みがあると、もう少し見回りとかはさんは楽しいからやってくださるので、もう少し事務的手続をサポートする民間の組織でも、庁内の組織でもいいけれども、あると多少違うかな。

すみません、もう一点だけちょっと話をさせてください。学生さんと話をするとA.I.の話がさっきちらつと出たので、SNSとかそういうものすごく踊らされて、この年は心配です。だけれども、彼たちはあれをエンタメだという人がいます。つまり、あれは遊びでやっていることであって、世の中のことを反映している、全部反映しているとは思っていないという人たちが結構多かったので、私もちょっとびっくりしたのです。あなたたち、そんなにそればっかり見ていてどうするのと言ったら、いや、これは漫画を読んでいるのと同じと本人たちは言ってましたから、YouTubeも同じです。なので、でも、そうじゃない人もいろいろ入っちゃうので、全部が全部というわけじゃないですけれども、そういう意味では、もっと今、社会がどう動いているかをしっかりと子供たちにも、それから大人にも学生にも、あからさまに見せていくということじゃないと、持続可能にはならないんじゃないかなというふうに私は考えています。

- 田野井一雄委員 まさに人生100年時代、60定年、65定年と、その後の人生というの私は重要だと、そんなふうに思っています。それは逆に皆さん方の動きにつながれば、私たちは子供会は小学校4年生になつたら役員になることと決めているのです。そうすると、うちの子供会は何か負担が多いとかってそういううわさが流れるのですが、やはりそこでやっていただくと、保護者同士の交流がでて、子供たちの交流がで

きるということで、何しろそういう壁を乗り越えないと本当にいけないと、今日は大変貴重なお話をいただきまして、これからも私も次の世代に向けて頑張ろうと、こんな気持ちになりました。ありがとうございました。

◎ 手塚参考人 ありがとうございます。

○ 麓理恵委員長 では、他に御発言もないようですので、本件についてはこの程度にとどめます。

本日は大変参考になる御講演をいただきまして、ありがとうございました。改めて御礼を申し上げます。これからも、これまでの経験を生かしていただきまして、市民活動を支えていただければなというふうに心から思ったところでございます。ありがとうございました。

本日の御講演内容を参考にさせていただきながら、当委員会としましても、さらに調査・研究を進めてまいりたいと思います。

手塚様、鈴木様、本日はありがとうございました。

○ 一同 どうもありがとうございました。



◎ 閉会宣言

○ 麓理恵委員長 以上で本日の議題は全て終了いたしましたので、委員会を閉会いたします。お疲れさまでございました。

閉会時刻 午前11時54分

速報版